



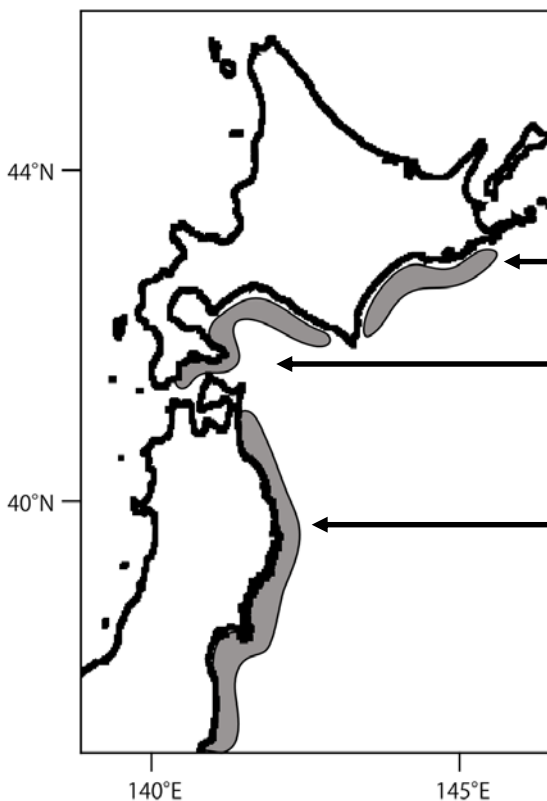
平成29年7月20日

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

平成29年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成29年8月～9月)のポイント



常磐～道南太平洋海域のスルメイカの来遊量は前年並、
道東太平洋海域は前年を下回る。

道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年並。
魚体は前年より小さい。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年並。
魚体は前年並。

問い合わせ先

国立研究開発法人水産研究・教育機構 北海道区水産研究所

担当：業務推進部 島田、塚本
資源管理部 伊藤、岡本

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

平成29年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2017年8月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2017年級群）

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より小さい。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：主漁期は前年より遅くなる。
- (3) 魚体：前年並。

I 予報の説明

2017年6月上旬～7月上旬に実施した漁場一斉調査の結果、および6月までの漁況経過の結果を主要な情報として8月～9月のスルメイカの来遊量を予測すると、常磐～道南太平洋海域では前年並、道東太平洋では前年を下回ると予測される。なお、いずれの海域においても前年の漁獲量は近年5年（2011年-2015年）平均を下回っていた。各海域における見通しは以下の通りである。

1. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れを主体に、津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れも含まれると考えられる。三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUE（いか釣り機1台1時間あたり漁獲尾数）は前年を上回ったことから、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年を上回ると予測される。6月までの漁況は前年より好調の漁港が多かった（表1）。一方で、6月下旬～7月上旬に日本海の津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）で実施された漁場一斉調査の結果から、日本海由来の来遊量は前年を下回ると予測される。以上のことから、常磐～三陸海域への来遊量は前年並と予測される（前年の漁獲量は近年5年平均を下回った）。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から、前年並の大きさの個体が主体になると考えられる。

2. 津軽海峡～道南太平洋

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れと津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが含まれると考えられる。津軽海峡東口周辺海域（41°N以北、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUEは前年を上回った。また、1.で述べた通り、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年を上回ると予測された。一方で、日本海由来の来遊量は前年を下回ると予測される（上述）。なお、6月に函館港に水揚げした小型いか釣り船のCPUEは前年を下回っていた。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並と予測される（前年の漁獲量は近年5年平均を下回った）。魚体サイズは、日本海および太平洋での漁場一斉調査の結果から、前年より小型の個体が主体になると考えられる。

3. 道東太平洋

この海域に来遊する漁獲対象資源は、太平洋沖合域を北上する群れと考えられる。漁場一斉調査における沖合域（143°E以东）でのCPUEは前年を下回ったことから、道東太平洋へのスルメイカの来遊量は前年を下回ると予測される（前年の漁獲量は近年5年平均を下回った）。水産研究・教育機構の海況予測システム（FRA-ROMS*）および第2回東北海区海況予報（水産研究・教育機構）によると、本年は道東太平洋海域付近に暖水塊が形成されておらず、親潮が強勢で第1分枝の張り出しはかなり南偏で推移すると予測されていることから（図1）、主漁期は前年より遅くなると予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から、前年並の大きさの個体が主体になると考えられる。

*国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム

II 調査結果

1. 太平洋第1次漁場一斉調査

6月上旬～6月下旬に太平洋で実施された漁場一斉調査（釣り）の結果、調査海域全体の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.13尾であり、前年（0.18尾）を下回った（図2）。三陸周辺海域では0.33尾であり、前年（0.07尾）を上回ったが、調査点10点のうち有漁調査点は1点であった（前年は17点中4点）。津軽海峡～道南太平洋海域では0.65尾であり、前年（0.15尾）を上回った。沖合域では0.03尾であり、前年（0.23尾）を下回った。

漁場一斉調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、モードが14cmにある単峰型の組成で、前年（15cm）並であった。海域別にみると、三陸周辺海域のモードは15cmにあり、前年（15～16cm）並であった（図3）。津軽海峡～道南太平洋海域のモードは14cmにあり、前年（16cm）より小型であった。沖合域のモードは16cmにあり、前年（15cm）並であった。

2. 日本海漁場一斉調査

6月下旬～7月上旬に日本海で実施された漁場一斉調査の結果、津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）における平均CPUEは5.2尾であり、前年（13.4尾）を下回った。外套背長組成のモードは16cmにあり、前年（19cm）より小型であった。

3. 新規加入量調査（参考情報として掲載）

5月下旬～6月上旬に太平洋で実施された新規加入量調査（表層トロールネット）の結果、外套背長10cm未満のスルメイカの平均漁獲尾数（30分曳網当たり漁獲尾数）は20尾で、前年（70尾）を下回った。分布域は150°E以西に偏っており、それより沖合側では皆無の点が多く、平均漁獲尾数も少なかった（図4）。

III 各海域の漁況経過

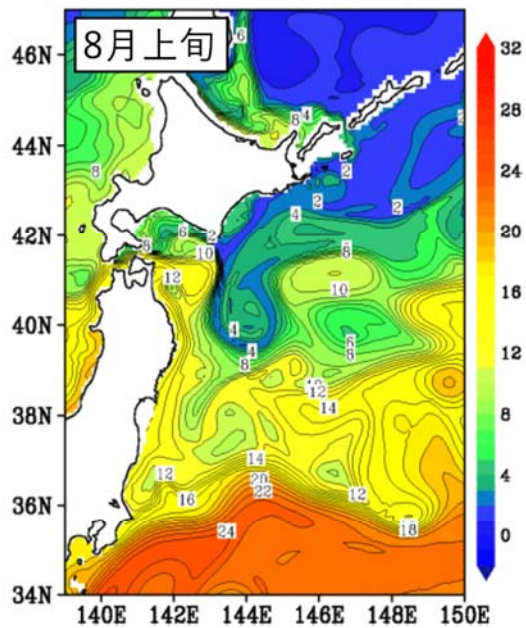
2010年以降の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量*は10万～16万トンで推移していたが、2015年には7.7万トン、2016年には2.6万トンに減少した（図5）。主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域に区分される。2016年8月～9月の漁獲量（生鮮）は14.4千トンであり、常磐～三陸海域では9.6千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では2.7千トン、道東太平洋海域では2.2千トンであった（図6）。近年5年（2011年～2015年）平均比は、常磐～三陸海域では66%、津軽海峡～道南太平洋海域では40%、道東太平洋海域では22%であった。根室海峡～オホーツク海と千葉県以南の海域での合計の漁獲量は66トンであった。

2017年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量**（生鮮：速報値、一部未集計）は1,023トンで、前年（938トン）並であった。常磐～三陸海域の主要港では951トンで、前年（681トン）を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では35トンで、前年（145トン）を下回った。千葉県以南では36トンで、前年（112トン）を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

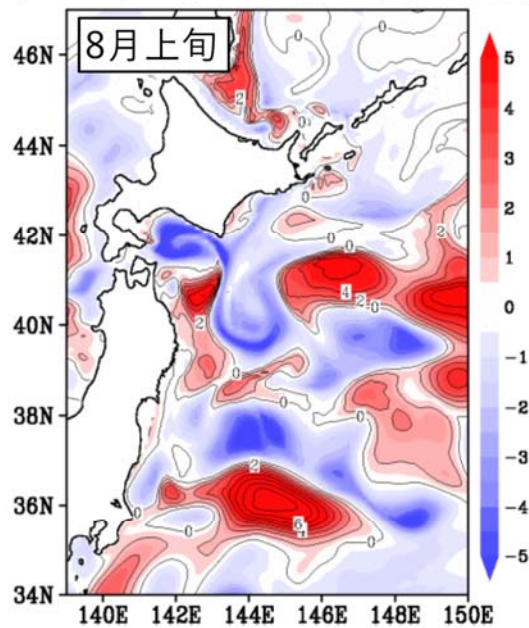
*主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の漁獲量で引き延ばしているため、図5および図6を含めた漁獲量は全て推定値である。

**水揚げ量は単純積み上げた数値。

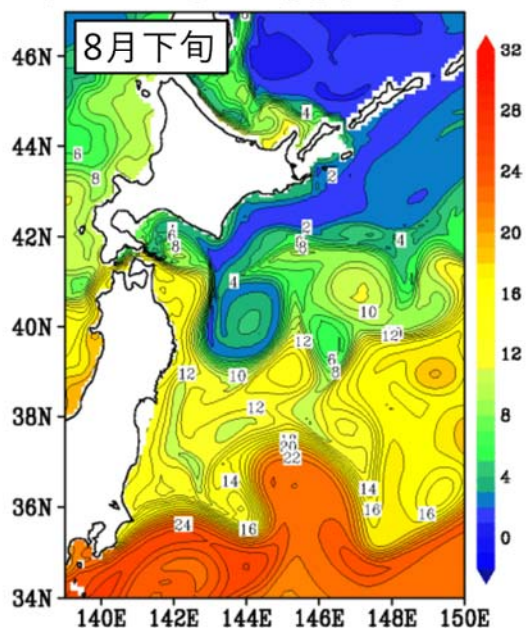
FRA-ROMS
2017/08-early Temperature[°C] (50m)



FRA-ROMS
2017/08-early Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)



FRA-ROMS
2017/08-late Temperature[°C] (50m)



FRA-ROMS
2017/08-late Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)

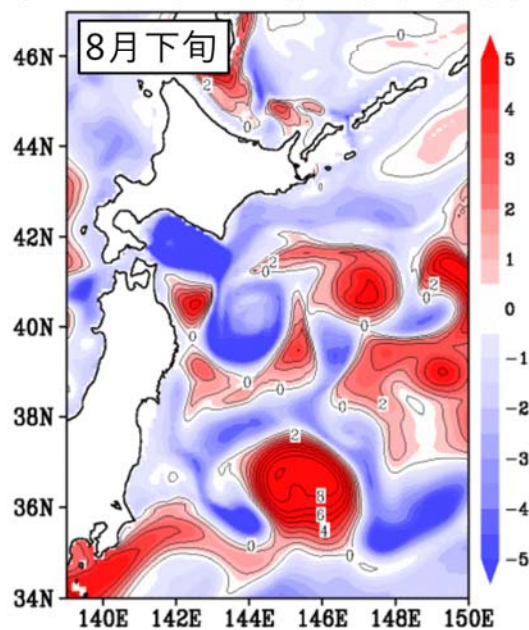


図1. 海況予測システムFRA-ROMSによる2017年8月上旬と下旬の（左図）50m深*予測水温および（右図）平年差
右図の青色は平年より水温が冷たい海域を示し、赤色は温かい海域を示す
*スルメイカの代表的な分布深度

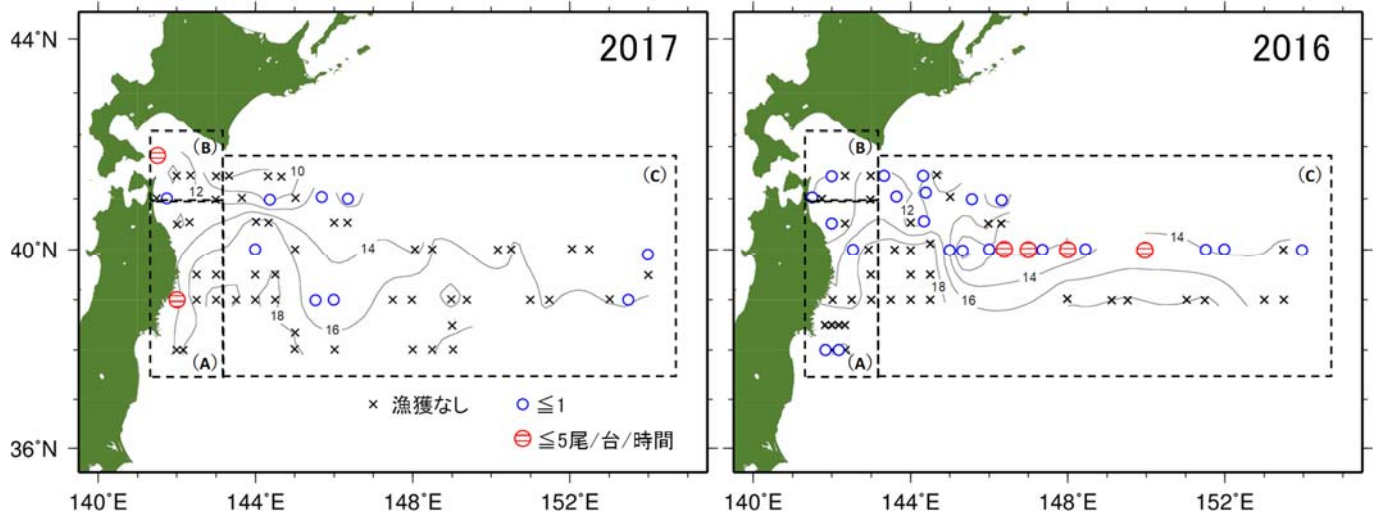


図2. 太平洋第1次漁場一斉調査の結果

2016年、2017年6月上旬～6月下旬のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を示す（⊕は5尾/台/時間、○は1尾/台/時間、×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）沖合域を示し、実線は海面水温の等温線を示す

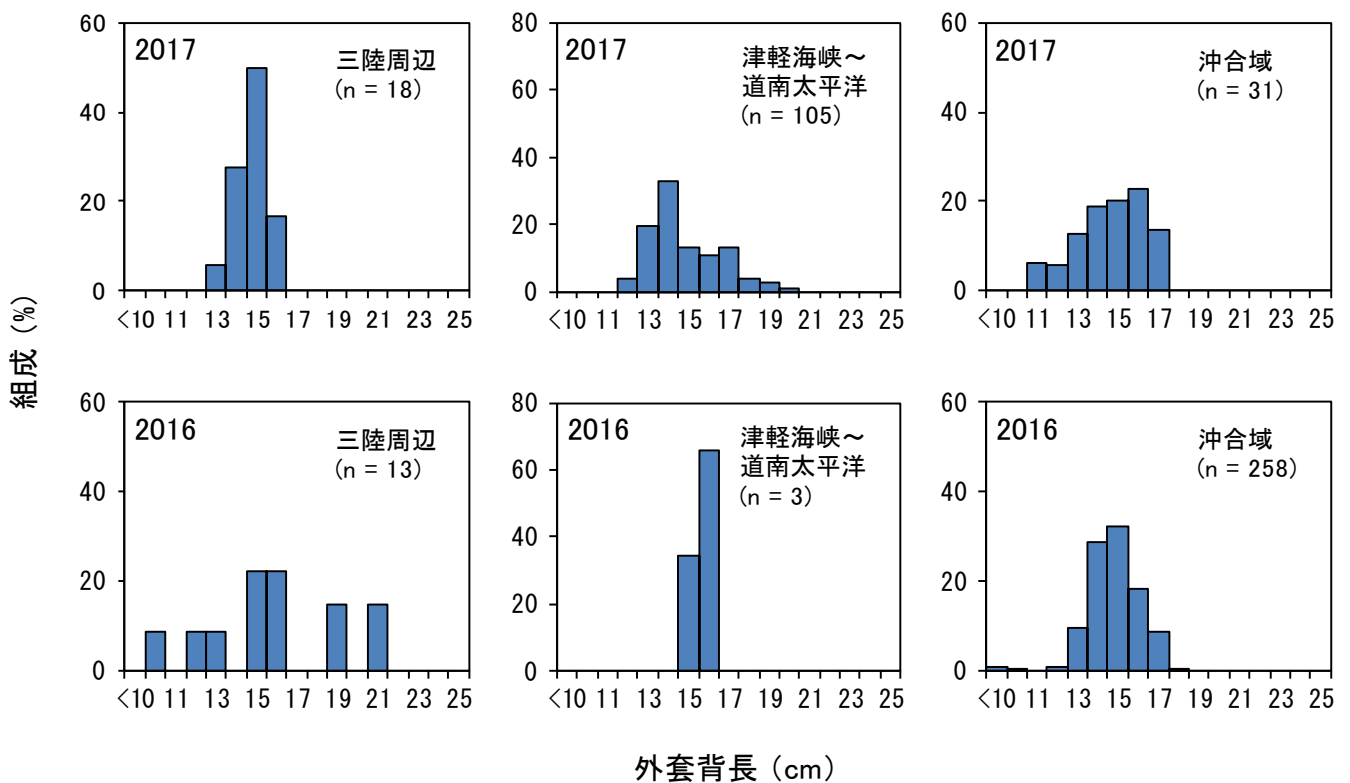


図3. 太平洋第1次漁場一斉調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋海域・沖合域）による外套背長組成の結果
nは測定尾数を示す

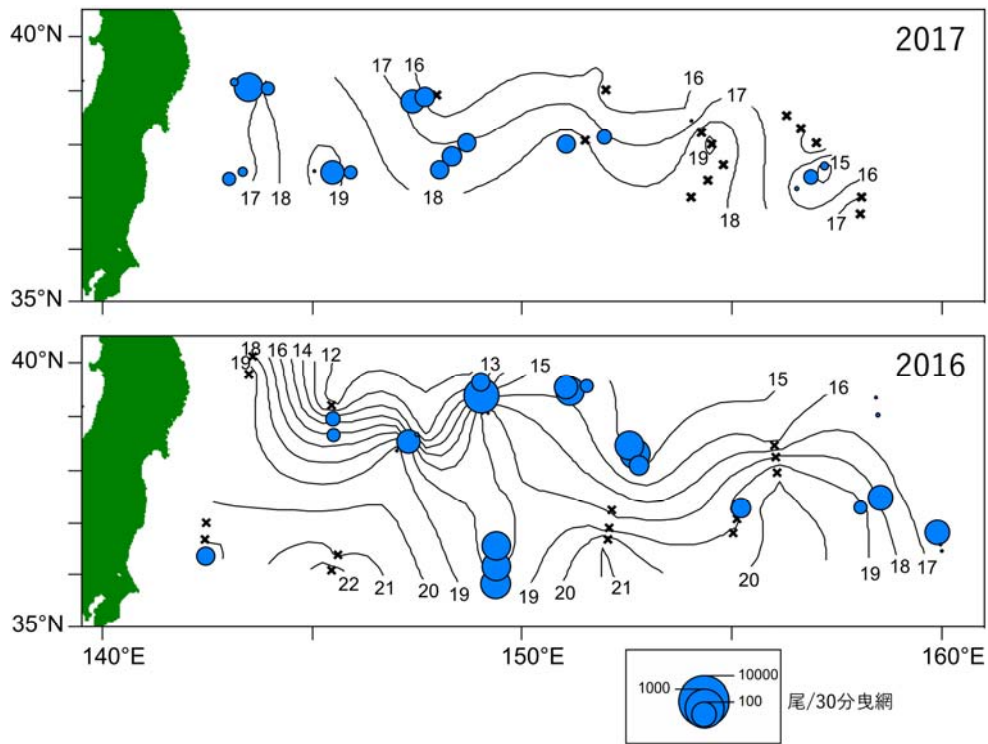


図4. 新規加入量調査の結果

2016年、2017年5月下旬～6月上旬に表層トロールによって漁獲された外套背長10cm未満のスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点を示し、実線は海面水温の等温線を示す

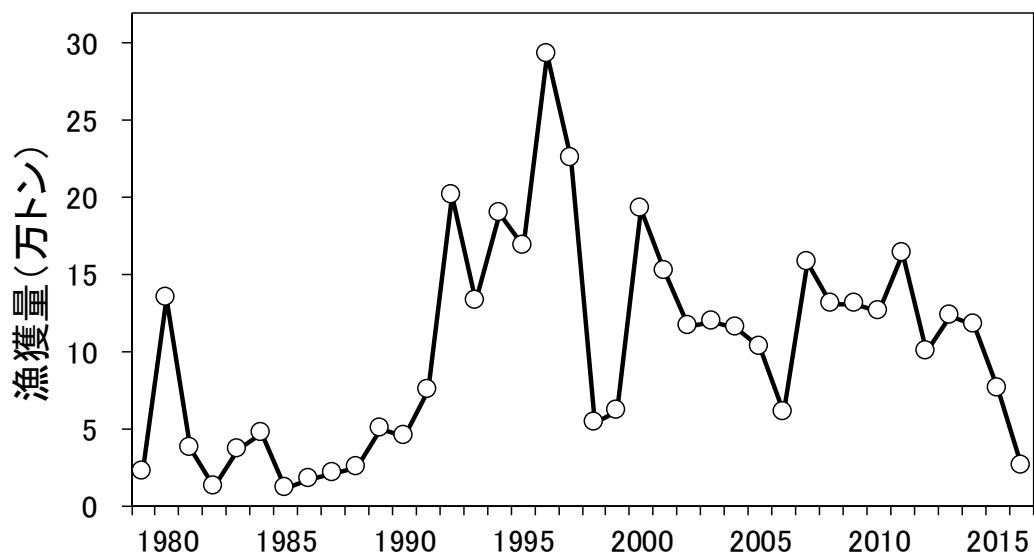


図5. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの漁獲量の年推移（集計値は暦年）

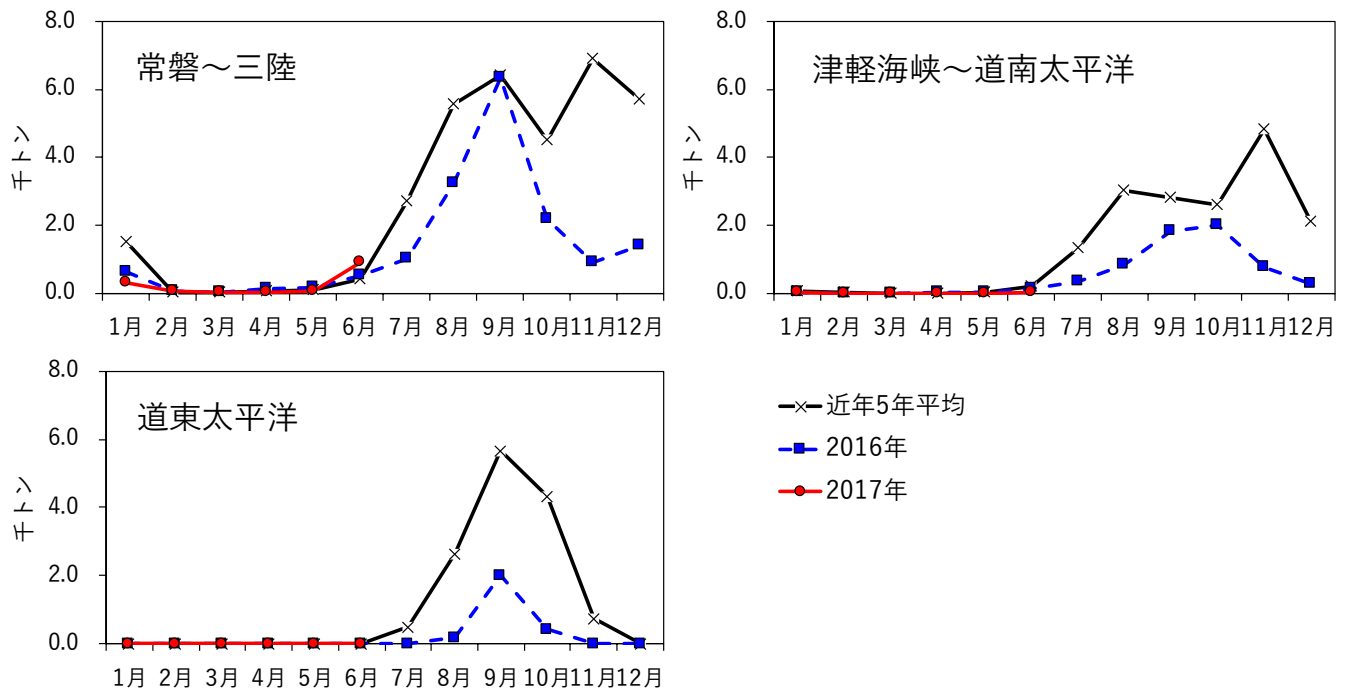


図6. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2011年～2015年の平均
 （釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過（2017年5月～6月、一部未集計・暫定データ含む）

| | 漁況経過 |
|-----------|--|
| 北海道 道東 | 7月15日の時点で初水揚げはない（前年は8月1日に釧路港で釣りによって初水揚げ）。 |
| 北海道 道南 | 6月の函館港への釣りによる水揚げ量は32トン（前年比53%）であった。CPUEは前年比49%であった。 |
| 青森 | 6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は22トン（前年比28%）、CPUEは前年比57%であった。 6月の八戸港と大畑港への釣りによる水揚げ量はそれぞれ4トン（前年比26%）、0.07トン（前年比2%）、CPUEはそれぞれ前年比48%、22%であった。また、八戸港への底びき網による水揚げ量は309トン（前年比192%）であった。 |
| 岩手 | 6月の主要7港への釣りによる水揚げ量は1トン（前年比145%）、CPUEは前年比102%であった。底びき網による水揚げ量は80トン（前年比82%）、定置網による水揚げ量は25トン（前年比227%）であった。 |
| 宮城 | 5月～6月の主要10港への底びき網による水揚げ量は383トン（前年比395%）、定置網による水揚げ量は9トン（前年比146%）であった。釣りによる水揚げは前年同様になかった。 |
| 福島 | 5月の主要4港への沖合底びき網による水揚げ量は0.27トンであった（前年0.003トン）。6月のデータは未集計。 |
| 茨城 | 5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚げ量は8トン（前年比488%）、小型底びき網による水揚げ量は3トン（前年比772%）であった。 |
| 千葉 | 5月～6月の主要3港への定置網による水揚げ量は7トン（前年比208%）であった。釣りによる6月の水揚げ量は0.1トン（前年比2475%）、CPUEは前年比619%であった。 |
| 神奈川 | 5月～6月の主要2港への定置網による水揚げ量は4トン（前年比197%）であった。 間口港への釣りによる5月の水揚げ量は0.09トン（前年比17%）、CPUEは前年比63%であった。 |
| 静岡 | 5月～6月の主要2港への釣りによる水揚げ量は9トン（前年比117%）であった。CPUEは前年比71%であった。 |
| 三重 | 5月～6月の奈屋浦港への中型まき網による水揚げ量は13トン（前年比16%）であった。また、5月の主要2港への定置網による水揚げ量は0.5トン（前年比18%）であった。 |
| 和歌山 | 6月のすさみ港への釣りによる水揚げ量は0.2トン（前年比33%）、CPUEは前年比323%であった。 |
| 高知 | 5月～6月の主要3港への釣りによる水揚げはなかった（前年もなし）。 |

注：CPUEは1日1隻当たりの漁獲量

参 画 機 関

| | |
|---|--|
| 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場 | 三重県水産研究所 |
| 地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所 | 和歌山県水産試験場 |
| 岩手県水産技術センター | 高知県水産試験場 |
| 宮城県水産技術総合センター | 一般社団法人 漁業情報サービスセンター |
| 福島県水産試験場 | 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 東北区水産研究所 日本海区水産研究所 |
| 茨城県水産試験場 | (取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所 |
| 千葉県水産総合研究センター | |
| 神奈川県水産技術センター | |
| 静岡県水産技術研究所 | |